

都市の顔づくり



横浜市技監 田村 明

1 生物としての都市の顔

都市は巨大な生物にたとえられる。それは多くの機能を有機的に結びつけて構成し、日々呼吸を新陳代謝をしていく。常に変動し、今日の都市は昨日の都市とはすでに相異している。都市は頭脳をもち意志をもつ。そして感情さえも持っているように思われる。

都市は生きている。巨大さと複雑さのためにその全貌はなかなか明らかにされないが、日々生々流動している生物にたとえることは、都市の本質をかなり適確に表わしているといえよう。

高級な生物になってくれば「顔」をもっている。顔はその生物を端的に表わしているところであり、喜怒哀楽を表わし、また、他に語りかけてくるところである。都市も高級な生物ならば「都市の顔」を持つことになる。

一般に「都市の顔」といわれるところは、主要駅の駅前や主要商店街、ビジネス街、シビックセンターやあるいは歴史的な街区、広場、城郭や社寺の一角であったりする。都市の場合は、人間や他の生物とちがって、顔も必ずしもひとつとは限らない。むしろ複数の顔を持つのが普通であろう。

顔は誰にでもすぐ見られ、また他人に見せる場所である。だからそれなりに、ひげをそったり、またひげをはやしたり、清潔にし、化粧をしたりする。都市の顔も、他所からきた人々が、真っ先にま

ずその都市を見る場所であり、感ずるところである。これに対して都市も、当然に顔をとのえておく必要がある。それは都市を代表して姿を見せる場所だからである。初めて訪れた人々は、大抵の場合に、真っ先にその顔といわれる地区に行くだろう。そして、その都市の印象として語られている多くは、都市の顔の部分である。都市の顔は、ある場合にはその都市そのものになり、その都市の個性を示すことになる。

2 都市の顔をつくるもの

しかし、多少ことわりを要するのは、一俣の建築物、一個の施設だけでは都市の顔とはいえないということである。どんなに立派なすぐれた建築物や施設でも、それだけで存在するのは、都市の名物や名所とはいえるかもしれないが、都市の顔とはいえない。都市はあくまでも多くの建築物や施設や植栽などの複合した姿であり、しかも、多数の人々がよりあつまり形成していくものである。そうした複合した景観全体が都市の顔になるのである。だから都市の顔は一挙に一事業で出来るものではなく、多くの人々が長い時間をかけて徐々に形成してくるものである。

ヴェニスサンマルコの広場が、ヴェニスの顔であることは誰も否定できないだろう。ところで、あの美しい広場は、長時間をかけて多くの施設がだんだんに積み上げられて形成されてきたも

のであって、決してある時に突然生まれ出たものではないのである。しかも、それは、現在も人々が愉しく利用し、そこに喜びや誇りを感じるように常時生きているからこそ顔になるのであって、いくら立派なものでも、誰も利用しないようなものや人々に愛されないものは顔にはならない。

つまり、都市の顔は、作っていくとともに成っていくという性質と、活用され、人々の心の中に生きていくという心情的要素さえ備えていなければならないのである。

また、都市の顔というからには、一定の空間的な広がりが必要であろう。したがって天井も低い地下街などは、ひとつの施設でもあるし、都市の顔にはなりにくい。しかし、ミラノのギャラリーのように豊かな空間性をそなえたものは、複合した建築物の上のようになっており、ミラノの顔であろう。その上、ドーモやその広場を加え、スカラ座を加えたギャラリー地区一帯は、ミラノの顔といえる。それは、さまざまな要素がからみあって構成され、すばらしい豊かな空間性をつくりだしているからである。

もちろん、人々が自由に立ち回ることができない場所は都市の顔ではない。この意味で、皇居や御所そのものは都市の顔とはいえないだろう。しかし、その外縁部、周辺部は他の施設や緑などとともにひとつの都市的な空間性をつくりだすので、都市の顔になりうるができる。

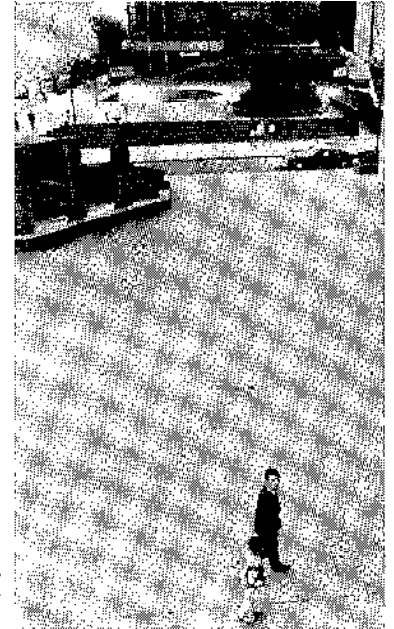
3 都市の顔づくり

それでは「都市の顔」はどのようにして作られていくものであろうか。また「都市の顔づくり」という特別な手法があるのだろうか。

前にも述べたが、都市の顔の形成のされ方を多少整理していえば、次の四つの要素がからみあってくる必要があるであろう。

- (1) 人為的、計画的に造っていくこと。
- (2) はっきりした明示的な計画ではなく、個々の構成員の手によって次第に形成されていくこと。
- (3) それにふさわしく利用され、運営されて、日々生きていること。

▲山下公園前ペナ広場
二つのビル間の協力によって二つの新しい広場が
生れる。
——「環境計画論」から転載



(4) その地区の人々はもちろん、都市全体の市民に愛され、誇りをもって語られること。
こうした要素のどれひとつが欠けても十分な都市の顔とはならない。そのため、(1)の造るという行為や計画の中にも、(2)、(3)、(4)の要素があらかじめ十分考えられていなければならない。ただ「都市の顔」をつくらうという為政者やプランナーの一方的な意志や事業だけでは、決して「都市の顔」にはなれないだろう。

したがって、「都市の顔」はじっくりと時間をかけ、長期的戦略の中で多くの人々のチエウ力を結集し総合化していく中で生まれる。これまでのような単純な建設事業計画としてではなく、また抽象的な総合計画でもなく、本当の意味の具体的な総合性のある計画からでなくては生まれてはこない。そこに多くの人々の熱意や愛情がこめられなければならないだろう。

もちろん、そこにリーダーシップも必要である。何でも事なかれの安易な妥協でするすると振りまわされていくうちには、顔としての統一性や個性を失ってしまう。多くの人々の熱意や愛情

をこめるとは、決してバラバラな個々の意志に解体することではなく、新しい姿を皆でつくりだしていくためには、個々の勝手な行動をおさえることが必要である。しかし、それはただ上からおしつけて規制するというより、全体としての美しい魅力的な顔をつくるために、個人が理性とよろこびと期待をもって自らが従うルールでなければならない。それには、都市というものは、個人が自己の利益だけを計ったのでは結局全体の利益にもならず、結果として自分の利益にもならないことを十分認識すべきである。

4 都市の顔づくりの幾つかの留意点

顔というからには必要なのは何といってもまず個性である。個性のない顔はどんなに美しくても白痴美や機械美にすぎない。都市を生物としてみるとときには、そこにすぐれた個性が表現されなければならない。

したがって〇〇銀座というような東京の亜流としての中心商店街などではとても顔とはいえない。他の都市に刺激をうけながらも、猿まねではなく自ら自主的に個性をつくりだすことが必要である。個別的、部分的な事業の断片的直輸入ではならない。

第二には、都市はいずれも相当の年数の中で形成され、歴史をもっている。その歴史の深さ、年輪のきざみが都市を個性的にもし、味わいを豊かにもする。もちろん都市は動いていくから、一瞬間で凍結されることはない。常に新しい要素がつけ加えられる。古いものも更新されるだろう。しかし、それはあくまでも個性を形成する歴史的遺産を十分尊重し、その連続の中で未来へと向かっていかななくてはならないのである。

第三には、都市を導いていく現実に根ざしながら将来を見きわめたヴィジョンで、またこれを生かしていくため、すでにのべたとおりの実践的で総合的なプロデュースシステムの必要性である。その役割はさしあたり都市自治体を中心にならなければならないが、それは政党的政治の場としてではなく、しっかりとした専門性をもったプロデュースシステム、計画システムが必要である。そ

こに新たな総合的専門家としての都市プランナーやアーバンデザイナーやコーディネーターなどが養成され結集されなければならない。

そして第四には、都市の顔づくりをたんに部分的なメイキャップにするのではなく、都市構造や都市の全体の質的アップを十分考えながら、いわば都市の体質を向上させながら、必要な顔のメイキャップをしなければならない。それがなくて、ただおしろいをべたべたと塗りつけるのでは、とても健康で美しい顔とはいえないのである。

第五には、都市の場合、顔は決してひとつではない。都市の現状にもよるが、できれば種類の異なる顔をいくつもそなえていたり、あるいは、ひとつのふんい気をもちながら、ニュアンスのちがう顔をいくつ持っているのもよい。顔を決して局部的に限定する必要はない。また、顔はおしつけでなるものでもない。

顔はしだいに多くなっていくにしても、まず自らの自覚をもった市民の手によって造られていくものであろう。

さらに第六には、都市の顔にも表情がほしい。季節であったり、時間であったり、そこに都市の喜怒哀楽が生きて時に応じて表現されたいものである。そうすれば、都市の顔は市民全体にとって顔としての実感をもつからである。

筆者紹介

たむら あきら
田村 明

<経歴>

昭和25年 東京大学工学部卒業。
昭和28年 同法学部法律学科卒業。
昭和29年 同法学部政治学科卒業。
運輸省、日本生命、環境開発センター、横浜市企画調整局長を経て、現在、横浜市技監。

<主要著作>

「都市を計画する」、「環境計画論」